

一月二十九日（金）

コーヒー豆が焙煎される香りを身体中に浴びながら、私たちはホイップクリームが添えられたバームクーヘンに、フォークを入れた。クリームを乗せて口に運ぶ。

「うん、美味しい」

向かいに座る史穂さんは、コーヒーとのマリアージュも含めた感想を言った。

決して広くはないお店に、定期的に人が入ってきては、コーヒー豆や焙煎を頼んでいく。お隣のお客さんも、焙煎待ちついでにお茶をされている人らしい。

「年内は今日までなんだって」

史穂さんに言われて、「あ、なるほど」と膝を叩いた。そういえば、この辺りのお店も何件かは「謹賀新年」や「賀正」と書かれた年末年始休業の案内を出していた。

「ウチも形の上では昨日からお休みなんだけど、出社しないだけでカタカタやってるわ」

「ウチもです」

史穂さんは、「それ、ウチのせいよね？ ごめんなさい」と言った。私は即座に「いえいえ、とんでもないです」と答えた。

「森田さんご夫妻には、大変お世話になりました。また、来年もよろしく願います」

「ああ、いえ、こちらこそ、お世話になりました」

史穂さんが深々と頭を下げるから、私も頭を下げた。向こうがなかなか頭を上げないから、こちらも頭を上げにくい。たつぷり間を置いて、史穂さんが頭を上げ、私も合わせるように頭を上げた。

史穂さんは、思い出したようにフォークを手に取り、バームクーヘンを一口大に切る。

「今日は、お嬢ちゃんたちは？」

「旦那と、私の下の弟が」

彼女は新しく入ってきたお客さんを目で追いかけているから、コーヒーカップを口

元に運んだ。

「お宅は？」

「ウチはほら、みんな自由だから」

史穂さんは、ケラケラと笑いながら言った。二人とも思春期、中高生ともなると手がかからなくなるのも当然か。いつかウチも、そんな風になるんだろうか。それはそれで楽なんだろうなと思う反面、寂しい気もする。

「あそこで芽衣さんとすれ違ったおかげで、私も今、ちよつとだけ自由だし」

彼女はニコツと笑った。そんな彼女はかなりの軽装、私も大した荷物もなく、すぐその駅前ですれ違った。彼女は向こうの郵便局へ、私はすぐその銀行へ。年内最後の平日にバタバタしていたら、史穂さんとすれ違って、「ちよつとお茶しない？」と今に至る。

「あ、もしかしてすぐに帰らなきゃいけなかった？」

私がぼんやりしていると、史穂さんが申し訳なさそうに言った。私は慌てて、「いえ、全然、大丈夫です」と言った。

「良かったー。この時期はどうしても、私たち主婦はバタバタするもんね」

彼女は残りのバームクーヘンを食べ、コーヒーを飲んだ。お皿に残っていたクリームを上手にフォークの上へ乗せていく。

「だから、休める時には休んどかないと」

かき集めたクリームは口に入るのかと思いきや、コーヒーの中に投入された。コーヒーをよくかき混ぜながら、「ね？」と私に笑いかけた。私も釣られて、ふつと笑ってしまった。

史穂さんは、私が食べ終わるのを待ってくれた。私が取ろうと思った伝票を彼女は目の前でサツと持つて行って、私が財布を出す前に払い終わってしまった。

お店の外に出て、横の駐輪スペースに止めた自転車のカギを外しながら、「すみません、ご馳走様です」と言うと、彼女は「気にしないで」と自転車のスタンドを上げた。

「じゃあ、良いお年を」

史穂さんは狭い歩道を、自転車を押しながら駅の方へ歩いて行った。私はそれを見送りながら、反対方向へ自転車を押して歩く。彼女も今頃、自転車に跨っているんだろうなと思いつつ、周囲を見回した。

初出 令和三年一月二八日 アルファポリスにて公開